

仏典翻訳の歴史とその変遷 ①

どのような思惟や学問もその歴史性と言語性を拭い去ることはできない。担い手である人間が、この宇宙全体の一部として、時間と空間という制約の中で存在し、言語を用いて生命活動を続けている以上、人間は必然的に歴史と言語を背負った存在となる。

しかし宗教においては、歴史性と言語性を超越した普遍的価値や存在を認め、その前提で信仰活動が展開される。それぞれの原典・聖典の示すものを、永遠不変の真理としてその普遍的価値を認めることで、自身の内面において信仰という絶対的な関わりが萌芽する。ただ、その原典・聖典の「ことば」がどのような意味を持ち、どう解釈するかという探求と求道は信仰者にとって永遠の課題となる。なぜなら、自己存在を含めてそのような探求と求道は、歴史性と言語性を伴わざるを得ないので、原典や聖典へのまなざしそのものに普遍的価値を認めることはできないからである。その意味において、原典・聖典の翻訳もまた同様に普遍的なものとして認めることはできないであろう。たとえどんなに優れた翻訳であったとしても原典・聖典と同格にそれを扱うことはできない。だからといってその翻訳が無価値であるということではない。それぞれの翻訳者による原典・聖典の詳細な分析と、「聖なる言葉」の探究によって紡ぎ出された数多くの翻訳を、歴史という時間軸において解体し、原典・聖典へのまなざしの諸相とその変遷を立体的に再構築すること、さらにその理解をもとに信仰者がそれぞれの宗教体験を通して原典や聖典が示すものの遡及を試みることは、普遍的真理に肉薄する手がかりとなる。

他宗教の原典・聖典の翻訳史と比較すると、天理教の原典翻訳の歴史はまだ浅く、その層も薄い。劫藕^{こうご}を経た仏典翻訳の嚆矢を求め、その変遷を辿り、伝道における翻訳の意義と役割について理解を深めたい。

仏典の言語

仏典翻訳の歴史をさかのぼると、その原典の言語はインド諸語であった。具体的には、それらはサンスクリット語、パーリ語、ガンダーラ語、そしてブディストハイブリッド（仏教混淆）サンスクリット語である。

インド諸語の中心はサンスクリット語である。「完成された言語」を意味するこのサンスクリット語は、日本では梵語と呼ばれている。サンスクリット語は古くからバラモン教の天啓聖典『ヴェーダ』の言語としてバラモンたちの口伝伝統を支え、釈迦以前の時代からすでに典礼言語として広まっていた。精緻な文法体系と深遠な語義、そして哲学的性格を有するこのサンスクリット語は、インド世界において、長く規範的学術言語として機能してきた。ラテン語などと共に屈折語の代表例とされるこのサンスクリット語は、単数、両数、複数という3つの数概念、男性、女性、中性という3つの性概念、8つの格変化（主格、対格、具格、為格、従格、属格、処格、呼格）を有し、態の変化を持つ多語幹語が複雑に関係する非常に難解かつ洗練された言語である。インド諸語のルーツであるこのサンスクリット語から様々なインド系言語が派生して現代に至っている。

そのようなサンスクリット語とは対照的に、古代インドでそれぞれの地方において一般的に用いられた様々な俗語はプラークリット（自然言語）とよばれる。釈迦自身が話していたとき

れる古代マガダ語もこのプラークリットに分類される。上座部の仏典は、プラークリットの中では比較的サンスクリット語に近い言語でまとめられている。現在それらはパーリ語仏典と呼ばれているが、言語学的にはその言語はピシャーチ語というインド西部の地方語の一種であると考えられている。実は、「パーリ」とは元来、特定の言語名ではなく、「聖典」そのものを意味する語であった。スリランカで成立した伝統的な三蔵に対する注釈書『アッタカター』において、経、論、律の三蔵が「パーリ」（聖典）と称されたことから、その言語を慣例上パーリ語と呼ぶようになったのではないかと考えられている。（水野、1990：74）

インド世界の北西部の地方語、ガンダーラ語もプラークリットに分類される。ガンダーラ語は、現在のパキスタン北部ペシャワールからアフガニスタン東部一帯のガンダーラ地方で広く用いられていた。アフガニスタン西部のパーミヤンやパキスタン北部のギルギットでもガンダーラ語仏典写本が発見されており、この言語が南アジアから中央アジアにかけて広く影響を及ぼしていたことがわかっている。

それらの言語以外に、サンスクリットとプラークリットの混淆言語、ブディストハイブリッドサンスクリット語がある。この言語には、サンスクリットの文法的劣化や音韻の変化といった特徴がみられる。

4世紀、北インドでグプタ朝が成立すると、サンスクリット語は公用語化され、一般の知識人の共通語として定着していった。さらに、思想的性格が次第に台頭した仏教は、他の宗教とも論争や思想交渉を行うようになっていった。そのような教理論争には正統な学術語、サンスクリット語が用いられた。その結果、教理のサンスクリット化の必要性が高まり、次第に仏典がサンスクリット語で書写されるようになっていった。紀元前後に誕生したとされる大乘仏典はもともとプラークリットであったものが、サンスクリット語に翻訳されることとなり、以後製作された大乘仏典の言語はサンスクリット語になっていった。

もともと仏教では、釈迦自身も弟子たちも多種多様な地方語、プラークリットを用いて布教活動を展開していたので、布教の先々で広まっていた釈迦の教えはそれぞれの地方の言語、プラークリットに基盤を持っていた。サンスクリット語による教えの再構築の流れの中で、プラークリットとサンスクリット語の混淆が起り、結果的にハイブリッドサンスクリット語と呼ばれる現象が起きたと考えられている。

一方、原語のまま仏典を保持していたスリランカの上座部は、逆に伝統的な經典の言語の優位性を訴え、三蔵の構成と定義を明確にしつつ、5世紀にパーリ語三蔵を確立した。さらにそれまでシンハラ語で伝承されていた注釈文献などをあえてパーリ語に翻訳し、再編纂した。そのようなパーリ化の結果、上座部は多様な展開を見せたサンスクリット語仏典の思想的影響を拒けることとなった。

このように仏教では、サンスクリット化とパーリ化という二大潮流の中で、大乘のサンスクリット語文化圏と上座部のパーリ語文化圏が別様に展開していくことになった。

[引用文献]

水野弘元『經典—その成立と展開』佼成出版社、1990年。